

Title	Albert Mathiez : La revolution Francaise, 1922-1927
Sub Title	
Author	占部, 百太郎(Urabe, Hyakutaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.153- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

Albert Mathiez: La Révolution

Française (1922—1927)

フランス大革命に關する著作は、汗牛充棟と云ふやうな言葉では、到底形容しきれない程に多數である。この大革命に關して、現に専門の月刊雜誌が發行せられて居るのを見ても、フランス大革命が有史以來の最大事件であつて、今日尙ほこれに對する學者の研究熱が如何に熾烈であるかを察す可きである。

フランス大革命に關する名著傑作だけでも指を屈するに違ない程だが、その多くは今や既にクラシックの部に屬して居る。ラマルティンや、チエールや、ミネーや、ティンヤ、カーライルやの著作は、夫れ／＼當時に於ては、何れも洛陽の紙價を高からしめた名著傑作であつたのだが、爾來フランス大革命の研究は大に進んで、是等の名著傑作と雖も、クラシックとして、美文としての價値以外、歴史の科學的價値に至つては、多少下落せざるを得ないのである。試みに就中最も特色あるカーライルの『フランス革命史』に就て見る。この著作は彼がフランス革命と云ふ歴史上の大事件を藉り來つて、専ら彼一流の史學的主觀を述べた嫌があつて、史實の詮索には少なからざる缺點が見受けらるる。フランス革命に就て著作を志したカーライルは、大英博物館にフランスから寄

贈せられた有名なる文献の備はれることを知つて、その借覽を申込んだ。それは容易に許可せられた。次に彼は博物館内で著作したいから、特別の讀書室を貸與せられたいと請求して拒絶せられた。彼は愠つて、それならば文献も借るには及ばないと斷つて、竟に自分の持合せた材料の外、友人ジョン・スチュアート・ミル等から借り集めた文献を用ひて、その著作を完成させた。彼の『フランス革命史』にルイ十六世とミラボーとの密謀の顛末を叙するところが脱漏して居るのは、彼が大英博物館の史料を參考しなかつたからである。ミラボーが晩年ルイ十六世の秘密顧問として、その湧くが如き縱横の才略を發揮した舞臺裏のカラクリを彼が知らなかつたと云ふ事は、吾等が彼の著作に就て、少からず遺憾とする所である。

今はクラシックに屬す可き以上諸大家の著作以外、十九世紀の終末から、二十世紀の初頭にかけて、フランス大革命に關する名篇大作は可なりに多い。パリ大學でフランス大革命を講じて居たオーラル(兩三年前死去)の著作は、その範圍多種多様に亘つて居て、佛國の地方に於ける革命の顛末まで詳細に研究したのである。併し乍ら、彼の代表作は矢張り一冊本の *Histoire Politique de la Révolution Française* (英譯本四冊)であらう。フランス革命研究の世界的第一人者と呼ばれた人の著作であるだけ、事件や人物に對する批判正確、スタイル亦明快である。強いて缺點を求むれば、餘りにデモクラティックで、國王や教會や貴族に對する同情が稀薄過ぎる點であらう。次にアクトン卿の *Lectures on the French Revolution* は、その博覽の點に於ては、フランス本國の

研究者をして三舎を避けしむる程だ。併し乍ら、元來講義案の儘なのを、卿の死後、遺弟達がその儘出版したのだから、文章もリイダブルでなく、史實の取捨も煩簡宜しきを得てない憾がないでもない。加之卿は専門家と雖も滅多に知らないやうな固有名詞を矢鱈に引用して、それに些かも説明もアツボジションも加へて居ないから、大多數の讀者は定めて困るであらうと思ふ。その他クロボトキンの Great French Revolution は、近頃邦譯が出来て居るやうだが、この著作は専ら大革命の舞臺に於ける第四階級の活動を叙した嫌ひがある。

餘り前文が長過ぎたが、本文の主題とする *La Révolution Française* の著者 Albert Mathiez に就て、私は殆ど全く知つて居ない。従來デイジョン大學文學部教授として近代史を講じて居たが、オーラールの歿後、巴里大學に聘せられてフランス革命史の講師となつた。彼の自序に據るに本書は元來一般讀者の爲に著されたものだから、何等の参考書も引用してないけれど、鉅多の史料を壓搾して成つたものだ云ふことだ。原書は三冊であつたものを、ダブリン大學のアリソン・フィリップ教授(近世史の大家)の夫人カザリンがこれを英譯してローヤルホクタヴオの一冊にまとめて、アメリカで上梓したものである。ソレルをオーラールこの著者とを擧げて、フランス革命の三大史家と稱する者もあるが、ソレルの著書に就て、私は全然讀んだことがない。この著をオーラールのそれと比較することも、却々の困難事であるが、兩者の間互に一長一短はあらうけれど、先づ材料の新しい點に於て、後者は前者に一籌を輸せねばなるまい。前に述べたやうにオーラ

ルは餘りにデモクラティックで、貴族や僧侶をコキ下ろし過ぎた嫌ひあるに引き換へ Mathiez の著作は、その批判大體に於て公平である。

それから本書に於て最も多しき可きは、フランス大革命の直接の最大動機となつたルイ十六世の財政の逼迫状態に就て、精細に數字を擧げて説明してゐる點である。ケムブリッジの近代史叢書に於ても、可成り數字上の説明が見へて居るが、その内容の解剖に至つては、到底本書のそれに及ばない。然るにオーラールの著書にはそれが一層不充足である。次に本書はカトリック教會の階級制度とその腐敗の状態に就ても他書に見ない説明が加へられて居る。尙ほ著者は『人權宣言書』が徒らに空疎の文字を並べて、その平等の主義はブルジョア間の平等に過ぎずと做し、又カトリック教のみを公認して、他の新教や猶太教に對して、單に私の禮拜のみを認めた不平等を指摘して居る。

一般の革命史家はマラーを以て激越な狂人扱ひするのだが、Mathiez は彼の卓見を認む可き一節を引用し居る。

In our eyes Riquetti was never more than a formidable instrument of despotism. As for Barnave and Lameth, I have but little faith in their civisme (devotion to the common meal)

リケッティはオルレアン公の革命勃發後に於て用ひた平民的名稱だ。バナーヴやラメト等はルイ十六世の走狗に過ぎないと云ふ意味なのだ。次に著者が従來史家の傳統的態度を破つて、ロベスピエールを以て、フランス革命の最も卓越した人物と稱揚し、又ラファイエットの虚榮と功名心に充ちた似而非民主政治家である

ことを指摘した點など、彼の獨創觀のひらめきが隨處に見はれて居るけれど、茲に一々それ等を引用することは出来ない。

アリソン・フィリップ夫人の譯筆は、その良人の援助(序文に斷つてある)の所爲もあらうが、流暢で克く生彩に富んだ原文の長所を描き出して居る。

私は本書を以て、フランス大革命を取扱つた最もアップ・トゥ・デートの述作であるを推獎するに些かも躊躇しない者である。(占部百太郎)

日本中世史の研究

(原 勝郎著
同文館發行)

故原勝郎博士の遺稿第一卷として先に「世界大戰史」が出版されたが、今回此につぐものとして、西田直二郎博士中村直勝學士等に依つて本書が世に出づるに至つた。原博士は京都帝國大學に於て西洋近世史を多年講ぜられてゐたが、日本史に關しても又造詣深く卓越せる論文を早くより發表されてゐた。特に一九二〇年に出版された *An Introduction to the History of Japan* は名著として知られ、一九二六年 *Histoire du Japon* として佛譯されてゐる位である。

今回編纂されたる本書は第一編を日本中世史となし、嘗て出版された日本中世史第一卷及びその續編を載せ、第二編日本中世史論考は著者が藝文、史學雜誌、史學研究會講演集、國華、史林等の諸雜誌に發表された諸論文中日本中世に關するもの二十種を集めた

もので、これは本書の大部分を占め、附録第一には歴史の研究及び隨筆、附録第二には日本史の概論及び書紀紀年考等を載せてゐる。

日本中世史第一卷の名著たることは既に一般に認めらるゝ所であつて、此處に贅言を要しないが、その豊富なる史料を自由に使用し、之を基礎として鋭利なる論述を進めらるゝ所や、その文章の流麗であり、その論述の正鵠なる點など今更ながら驚くべきものであり敬服すべきものである。本書は嘗て明治三十九年日本中世史第一卷(鎌倉前紀武家勃興時代)として富山房より出版されたものであつて、博士の序文に依れば、三十六年の秋に稿を起されたが、中途日露戰爭起り、博士自ら干戈を執つて戰場に出でられた爲めに戰爭終了後始めて出版せられたものであると言ふ。博士は本書に於て武士階級の發生とその發達を取り扱はれ、先づ初めに平安時代の文化が非常に不健全のものであつたことを各方面より論じ、かゝる外冠玉にして内敗絮たる文物は必や早晚其假面を脱するの時至ると言ひ、藤原時代の貴族生活を詳細に検討してその内に存する矛盾を指摘し、貴族の勢力の没落武士階級の發生の何に依て起つたかを述べ、中央と地方との懸隔の大なることを説いて東國地方に於ける武士階級の成立を述べ、保元平治の亂を経て遂に武士が、政權を掌握し鎌倉に幕府を開設するに至るまでの事情を説いてゐる。要するに本書に於て博士は、從來暗黒時代としてあまり顧られなかつた中世時代は、實は「本邦文明の發達をして其健全なる發起點に歸せしめたる點に於て、皮相的文明を打破して之を實質なる經路によらしめたる點に於て、日本人が獨立の